

# ソヴィエトにおける英語学

## ——超線形分析\*——

岡 部 匠 一

### I 定位と展望

モスクワ国立外国語研究所のイー・エル・ガルベリン教授は、現在72才、同研究所に語彙論と文体論の講座をもつソヴィエト英語学会の耆宿、現在でも、ソヴィエトの英語学・文体論研究の第一線にあり、若い研究者を指導し、かつ、東欧、北欧の大学、研究機関の求めに応じて、講演に飛び廻っている。近く、Mouton 社から、論文集も出版されると聞いている。

3年まえの夏、筆者は、日ソ親善協会の派遣で、第13回、外国人ロシア語教師国際セミナーに参加した。15ヶ国から80人の、諸外国で、ロシア語の教授・研究に携っている研究者、および一部ジャーナリスト、翻訳家たちが、現プーシキン研究所、当時のモスクワ大予科のロシア語研究所に招待された。

実用ロシア語の refresher course も含めた、文学、語学、芸術のアクチュアルな問題に関する講演、教授法から、ソヴィエト現代絵画までを包摂する分科会形式のセミナーが、8月の夏休み一杯に展開された。

セミナーの合間を縫って、ロシアの夕べ、歌と踊りと映画への招待、ロシアケーキと、サモワールのお茶の夕べ、フルコースの晩さん会や、徹しようのお別れの会があった。

週末のいく日かは、モスクワ北のザゴルスク寺院へのバス旅行、長駆400キロ南して、文豪トルストイの聖地ヤースナヤ、パリャーナへの訪問など、眩ゆく、あわただしい、夏の饗宴、けんらん豪華な招待プログラムではあった。

筆者が、10年以上にわたって私淑していたガルベリン教授に会う機会を得たのは、このセミナーも終りに近い8月28日のことである。主催者、プーシキン研究所によって企画された、キエフの旅行に、同室の東大のS氏は、出て、筆者は残り、長い間の夢であったガルベリン教授と会うことができた。

セミナー中は、ロシア語が公用語、筆者は、シャーバロフカ街のテレビ塔を眼の前にするモスクワ大学外国人教師館の館長室で、教授の肉声を耳にし、電話の冒頭に、教授の提案ですっかりさびついてしまった英語をしゃべった。

\* 本稿の作製に、筆者は、イー・エル・ガルベリン教授から恵贈された資料によった。また、1973年、第13回ロシア語教師国際セミナーに参加し、筆者は、モスクワ、アルバーツ街の教授宅で、教授と合う機会を得て、ソヴィエトの語学的文体論について、教示、啓発された。ここに記して謝意を表したい。

また、本稿の第2部、〈超線形分析〉以前——文体研究の史的展望——の資料収集、とくに、『言語研究の諸問題』の収集には、昭和50年度(「ソ連における構造言語学と変形文法 1950~1975」, 課題番号061049)、51年度(同テーマ、課題番号161183)の援助を受けた。

ガルベリン教授の英語はすばらしかった。それは、口のなかにこもるようなアメリカ英語ではなく、典型的な British English, まさに外国人が学んで、完璧の域に達したという感じであった。ロレンツ・モールスバッハの英語もかくの如くだったのか、とふと思ったことだった。

モールスバッハ (1850—1946) は、ゲッチンゲン大学に在職中、ロバート・バーンズの詩を、学生に朗読させたと、「モールスバッハ70才の生誕記念に寄せて」で、フリッツ・レーダーは書いている。

筆者は、モールスバッハの愛弟子で、いまサンタ・モニカに悠々自適しているワーナー・リーポルト教授から、モールスバッハの英語について聞いた。「先生の英語はすばらしかった。ドイツ訛が全くなく、信じられないほど完璧だった」と。

「日本に来ませんか？」の筆者の誘いに、「I should like to, but it's a dream」と別れるとき遠い眼をみせたリーポルト教授の英語もすばらしかった。

その昔、モールスバッハが、詩の朗読を学生たちに教えたように、ガルベリン教授は、学生たちにシェイクスピアを朗唱させ、Sonnetsを講じ、このすばらしい詩の文体を精緻な筆づかいで分析する。[*An Essay in Stylistic Analysis*, Moscow, 1968, p. 17-34]. 音楽に対する深い造詣があり、美しい英語を話すガルベリン教授の書くものに、私は、Forster が、*Aspects of the Novel*⑩でいう‘詩’(song)を感じた。

教授が、私信で示唆していた‘情報理論に基づく文体の分析’⑪は、柔かい tone で語りかけるような Superlinear Analysis に結実した。

本稿では、ガルベリン教授の最も新しい論考、‘An Experiment in Superlinear Analysis’ (*Language and Style: An International Journal*, vol. IV, Nr. 1, 1971, p. 57-72) を視座の中心に据え、教授の他の諸論文—著書、編著書⑫—主として個人的に贈られたもの—を援用しながら、筆者は、ソ連文体論研究の広がりと深さを提示しようと試みた。

## Ⅱ <超線形分析>以前

### ——文体研究の史的展望——

ソヴィエトの文体論は、当然のことながら、ソヴィエトの言語学者、国語学者のロシア語文体論の研究に始まる。「文体の根本問題に対する理論的関心、文体の根本概念を、言語学の独立した研究対象として規定すること、文学作品のさまざまな言語と文体の体系的研究の試みは、最近30年間のものである」と、1954年にソローキンは書いている⑬。

このソローキンのいう、1950年以前の30年間で代表するロシア語文体論の研究の主なものは、シチュルヴァの『現代ロシア語文語』と、ヴィノグラドフの論考、「主として17世紀—18世紀のロシア語文語の歴史の問題」である⑭。もちろん、この二人に加えて、ペシコフスキー (A. M. Пешковский), ヴィノクル (Г. О. Винокур), ブラホフスキー (Л. А. Вулаховский), トマシエフスキー (Б. В. Томашевский), ゴフマン (В. А. Гофман), ラーリン (Б. А. Ларин) などの研究も逸することはできない。

さらに、50年代に入っては、グボージェフの『ロシア語文体論概要』、エフィーモフの『文学作品の言語の研究』および、「19世紀から20世紀初頭のロシア語文語発達のいくつかの問題」(『言語研究の諸問題』1953 vol. 4), リーゼルの「言語学の諸問題に関するスターリンの

労作からみた文体の問題」(『学校の外国語』vol. 2 (1952), 15) および、レーヴィンの「芸術作品の言語の問題」(科学アカデミーの『レーニン記念公開講演』, 1952, 49-56ページ)である。

しかし、ソヴィエトの文体論、とくに、言語的文体論の科学的研究は、1954年から55年にかけての『言語研究の諸問題』に主として発表された。これら関係論文の筆者と題名を年代順にあげておこう。

1. ピオトロフスキー、「いくつかの文体のカテゴリーについて」(P. Г. Пиотровский. 'О некоторых стилистических категориях' <Вопросы языкознания> vol. 1(1954), : 53-68.)

2. ソローキン、「文体論の基本概念の問題」(Ю. С. Сорокин, 'К Вопросу об основных понятиях стилистики' <Вопросы языкознания vol. 3(1954) 2 : 68-81.)

このソローキンの論文は、<討論欄>に載せられているが、『言語研究の諸問題』編者は、この論文について、次のように注している。

「1954年度の本誌、第1号に、ピオトロフスキーの「文体のいくつかのカテゴリーについて」を掲載して、我々は、1953年6月19日から23日に、ソヴィエト連邦科学アカデミー言語学研究所の拡大評議会で、「文体論の基本概念について」の、ユー・エス・ソローキンの報告で提案された共通語の文体問題の討論を起こすことを意図している」。編集者たちは、さらにことばを継いで、「ここに発表されたユー・エス・ソローキンの論文は、上の報告の本文に手を入れたものである。我々は、始められた討論が継続されることを期待し、文体論の分野で仕事をしている同志すべてが、この討論に参加することを期待する」<sup>⑩</sup>と結んでいる。

ピオトルスロフスキーは、上記論文で、「ソローキンは、文体の概念は、本質的には、コンテクストの概念と一致する、と結論している。しかし、このような問題の解決は、言語の中にある文体の客観的存在の否定となる」とソローキンを批判している。

ピオトロフスキー、ソローキンに続いて、54年から55年にかけて、上記の編集部の要請を受けて、『言語研究の諸問題』誌上の討論に参加した言語文体論の論文を拾ってみる。

3. ブダゴフ、「言語の文体の問題」(P. А. Будагов, 'К вопросу о языковых стилях' <Вопросы языкознания> vol. 3(1954) : 54-47)

4. ガルペリン、「ことばの文体と言語の文体」(И. Р. Гарьперин, 'Речевые стили и стилистические средства языка' <Вопросы языкознания> vol. 4 (1954) : 76-86.)

5. ステーパーノフ、「文学と科学の文体」(Г. В. Степанов, 'О художественном и научном стилях речи' <Вопросы языкознания> vol. 4 (1954), 87.)

6. アドモニー、シーリマン「言語的方法の選択と文体の問題」(В. Г. Адмони и. Т. И. Сильман, 'Отбор языковых средств и вопросы стиля', <Вопросы языкознания> vol. 4 (1954) : 87-92.)

7. フェドローフ、「文体のいくつかの概念を弁護して」(А. В. Федоров, 'В защиту некоторых понятий стилистики, *ibid.* (1954) : 65-83.)

8. 編集部「文体問題の討論——受理した論文の抜粋」*ibid.* 6 (1954) : 80-87.)

9. ヴィノグラードフ、「文体論の問題の討議のまとめ」(В. В. Виноградов, 'Итоги обсуждения вопросов стилистики')

これら、「言語研究の諸問題」誌の1954-55年の両年にわたって、ソローキン論文によって触発された諸問題、文体論の対象、内容、文体論の言語学内での位置付けの、上記討論参加

論文のまとめと、立体的展望の詳細は別の機会に譲るが、ごく簡潔にまとめてみよう。

ソローキンの論文が、文体を文脈に解消し、文体論の存在を否定するような受けとられ方をしたために、ソローキン論文と編集部呼びかけに筆をとった諸家は、文体論の樹立という課題を、強く自らに受けとめ、尖鋭な意識をもって、文体論の、対象、内容、課題に肉迫した。この結果、『言語研究の諸問題』詩上の文体論論争、論考は、これ以後のソヴィエトの言語的文体論の方向を定礎したといえよう。

### Ⅲ 現代のソヴィエト言語文体論

#### —超線形分析—

次に、現在のソヴィエト文体論の研究の方向について、ガルペリン教授の証言をみよう。

「現在、文体論研究の分野には、次のようなものがある。

1. 一般言語学の一分野としての文体論の主題と内容、文体論の研究。
2. 文体手法、および言語の表現手段、すなわち、付加的な情報の研究。これには、本質的情報に転化するものもあり、またときには、発話にある感情的色彩を与え聴者・読者から一定の反応を誘発するものもある。これらの手法や方法は、明らかに一定の体系をつくる。この体系のパラメーターは、今後の研究をまつ。ソヴィエトの文体論学者は、特殊な文体的手法をとりだすときに、phoneme, lexeme にならって、styleme なる術語の設定を考えている。
3. 文学語の下位組織としての言語の文体の研究。
4. 作家の個人の文体の研究。この個人の文体は、一方では、文学語の発達の傾向を反映し、また一方では、文学者が、既存の文章規範を、どう個性的に扱うかを反映するものと考えられる。もちろん、ある一定の時期の中での文学語の規範の揺れは、文学者の個人の文体に最も尖鋭的に反映する。
5. 詩の言語の研究、詩は、それ自身の構造特性をもつコミュニケーションの特別なタイプであり、それ独自の機能と発展の法則をもち、あるメッセージを伝達する独自の方法・体系をもっていると考えられる。

以上五つの分野において、かなり多くの研究が積重ねられ、また、モスクワ国立外国語研究所では、ガルペリン教授の指導のもとに、学位論文にも結実している⑦。

次に、いま枚挙した五つの研究分野のうち、4)の〈作家の個人の文体の研究の分析方法〉を、ガルペリン教授の「超線形分析の実験」(注3, d)についてみてみよう。一般論から始めよう。

ソ連の言語文体論の特色は、コミュニケーション理論を基礎としていることである。しかし、この理論的基礎の詳細も、上に述べた『言語研究の諸問題』誌上の文体論争・論考の詳細と共に、別の機会に譲るが、ここでいえることは、ソ連の文体論では、〈言われたものから言われていないもの〉への研究を目ざしているということである。これは、我々も日常よく経験することであるが、我々は、言われたことから、言われなかったことを理解することがある。この言われないもの、ちなわち、余分な情報を運ぶ広い意味での言語形式を、ソ連の言語文体論では、informational form と名付ける。

どんな言語形式でも、その形式の使用の範囲、使用・適用の幅を規定するなにか(something)がある。この〈なにか〉を見つけることは容易ではない。そして、この something

こそ superlinear なものとソ連の言語文体論は考える。ちょうど、pitch とか stress とか、いわゆる intonation contour はアメリカの現代の記述言語学では、suprasegmentals (超分節音素) と名付けられ、イギリスの言語学では、prosodemes といわれているが、これは、個々の音素を超えて音連鎖全体にかぶせられて、意味を弁別する働きを担うものと考えられている。たとえば black bird が、「黒い鳥」なのか、「つぐみ」なのか、また light house keeper が「燈台守り」なのか、「(体重の) 軽いハウスキーパー」なのかは、個々の分節音を超える、pitch と stress の配分の型——configuration——によって識別しなければならない。

自然言語は、discrete で linear なものであるということは、音の連鎖の前後が沈黙で占められ、その発話は、一次元の軸をもつ時間軸上で、ある範囲にまたがるということを言っている。スミルニッキーは、その『古代英語』の中で、我々は、CTOR (機) を  $C_{T,R}^O$  とは発話できないといっている<sup>⑧</sup> が、これは、いま筆者が述べたことを具体例で解説したものである。書かれたばあいには、右(左)から左(右)の横書きにせよ、縦書きにせよ、言語の大小の単位や連鎖は、直線的な二次元の軸に配列されて、時間をも含めて、四次元的事象を表現することになる。それゆえ、superlinear な something とは、いま述べた意味で線条的に並べられている言語の大小の単位の連鎖によって顕在的に——語句の意味の総和的結合によって——表現されるものを超えて、それらを覆って表現されるものといえよう。

この superlinear something を規定する code、我々をして、この superlinear something をとりださせる parameter があるはずである。この superlinear code は、さきに、ソ連の言語文体論の第3の研究分野であげた styleme の parameter と同じものであるはずだが、これは、今後の研究に委ねられている。styleme は、phoneme のように、厳密に規定されるには至っていない。styleme は、一つひとつの記号が、いまひとつの別の記号と関係づけられているという意味での体系—system—としては、とりだされていない。

たとえば、詩を考えてみると、どの一篇の詩にも、上に述べた意味でのその詩の線条的、字句の意味に付加されてくるなんらかの情報—意味—がある。語句の個々の意味、それらの語句の統語的な結びつき方によってつくりだされる線条的・字句の意味を超えたところに存在する意味こそが、まさに、超線形的意味であり、これこそが、その詩の本質の意味であることが稀れではない。

この超線形意味—superlinear meaning—は、‘目に見える’字句的な意味—literal meaning—(＝線条の意味) と並列的に実現される。それゆえ、ソ連の言語文体論では、線条の意味、字句の意味は、超線形的意味の形式—form—として働くと考ええる。すなわち、字句どおりの意味が、字づらを超える意味の形式となっているといえよう。そして、さきに述べた意味での、すなわち、線条の意味を form として、線形的意味を媒介として実現されるという意味で付加的—additional—な、超線形意味は、いま述べたように、詩を含むある種のコミュニケーションでは、字句的、線条の意味を圧倒してしまうことが多い。

この、時としては、第一次的、本質の意味に転化する超線形意味は、線条的・字句の意味を形式として実現されると述べたが、超線形意味は、文体分析上の一つの仮構物(hypothetical construct)ではあるが、ある言語形式(語・句)の特殊な意味・用法と、それら言語形式の結合の仕方を形式として実現されるという意味では、完全に一つの実体—entity—であり、最も広い意味で考えられた言語形式と、その結合の仕方に、本来的に内在しているものであるともいえよう。

フランスで開発され行われてきた *explication du texte* (interpretation of the text) という文芸作品の研究法がある。これは一言でいえば、＜text の解釈＞に、伝記的事実の研究成果などの夾雑物を持ちこむことなく、「テキストの中にすべてがある」という考え方に立脚する作品研究の方法である。すなわち、*explication du texte* は、勝手気儘な妄想をたくましくして、作品の中に恣意的な想像の飛翔の産物を盛りこまずに、ことばで表現されたもの、すなわち、超線形分析でいう *linguistic parameter* を手がかりとする作品分析と考えられる。ロシアの有名な *satirist*, サルチコフ・シチュードリンが、「事実が存在しないほど空想を翔るものはない」といっているが、もし、text の解釈が目に見える言語材料に基かないとすれば、その解釈は、まさに荒唐無稽な解釈となりうる。たとえば、Carlos Baker が、Hemingway の *For Whom The Bell Tolls* を分析して、Pablo や Maria, Pilar などのゲリアが立て籠もる山寨に、三機編隊の敵機が飛んできたのは、彼らの運命が旦夕に迫っていることの symbol だと述べた。しかし健全な常識は、飛行機が三機編隊で飛ぶのをあたりまえの描写と捕える。アメリカにおける *novel criticism* が、symbol hunting の末に袋小路に陥ったのは、notorious な事実である。＜見えるものから見えないものへ＞を目指す超線形分析は、不羈奔放な symbol hunting による＜ないものがあると見る＞術学的批評ではない。

詩や格言が、二層・重層的なメッセージを伝達することはよく知られている。二層のばあいには、一つは、字句に即した具体的な意味であり、いま一つは、いわゆる転義の意味といわれるもので、字句に即してでなく、超字句的—superliterally—に伝えられる。格言、諺のばあいには、この超字句意味、超線形意味は、それらの格言、諺が用いられる文脈に依存している。たとえば、add fuel to the fire (火に油をそそぐ) という諺を考えると、この字句の意味のほかには、to aggravate matters (事態を悪化させる), to cause growing disturbance (騒ぎをますます大きくする), to increase irritation (苛立ちを増す) などの超字句の意味、超線形的意味が、それぞれの意味を実現させるコンテキストで表われて、字句の意味、線形的意味を圧倒する。このばあいにも、すでに述べたように、字句の意味（線条の意味）が、超字句の意味（超線形意味）を容れる形式として機能していると考えられる。

形式についていえば、どんな言語形式でも、言語形式の特質は、その多義性にある。言語形式は、その本性上、いろいろと異なる内容を容れることができるが、ひとたび、ある＜形＞—語形の変化形や語形式の並び方—をとってしまうと、その形になじまない内容は排除して容れない。諺や格言の形（式）—語（形）、語（句）の選択と配列—も異なる意味を容れるが、その数は限られている。

たとえば、A rolling stone gathers no moss. (転がる石には苔がつかない) という格言は、字句どおりの意味のほかには、①‘ひとつの場所に長くいない人、たえず職を変える人は儲からない’という意味、さらには、②‘ちょっと愛してはやめるということを、しょっちゅうやっている人は、ほんとうの永続的な愛を得ることはできない’という意味をももっている<sup>⑩</sup>。しかし、この二つの転移した意味は、第一義の字句の意味、‘転がる石には苔がつかない’から、たやすく見てとることができる。なぜなら、さきに述べたように、格言、諺の超字句の意味—超線形意味—の実現は、文脈に依存しているが、格言は、ある一定の場面（＞文脈）で、しばしば使われるので、本稿で、すでにしばしば述べた＜付加の意味＞の幅が狭められてしまうからである。

たとえば、Rome was not built in a day. (ローマは一日にして成らず) という格言は、字

句的意味のほかに、付加的意味——超線形意味——として、‘意義のある仕事は、厳しい多くの労苦を必要とし、完成までには長時間かかる’ という意味をもつが、このほかに、この格言は、‘遅延の言い訳’ に使われる。次の例では、文脈によって、この格言が言い訳として使われていることがはっきりとしている。

‘Haven’t you finished mowing the lawn yet?’ complained Mrs. Nagg.

Her husband mopped his brow with his handkerchief.

‘Give me time,’ he answered, ‘Rome wasn’t built in a day.’

(「まだ芝刈りをやってないんですか？」ナッグ夫人はなじった。

亭主は、ハンカチでひたいの汗を拭いて言った。

‘時間をくれよ、＜ローマは一日じゃでできなかった＞よ、)

しかし、詩のばあいには、話は別になる。詩の中では、きわめてありきたりの語(句)や、語(句)の組み合わせ——並び方——にも、まったく予期しない意味がしばしば表われて、その新鮮さと目新しさで、我々読者を驚かす。またさらに、詩は、語の並べ方によって、その語群を構成している一つ一つの語に、その語のふつうの意味から想像もできないような意味の実現を可能にする。事実、詩では、語(句)は、それらの語(句)の散文における結びつき方からは考えられないような結び方をみせる。たとえば、芥川龍之介は、「レーニン第三」と題する詩で、得意のアフォリズムを駆使して書いている。

誰よりも十戒を守った君は／誰よりも十戒を破った君だ。／誰よりも民衆を愛した君は／誰よりも民衆を軽蔑した君だ。／誰よりも理想に燃え上った君は、／誰よりも現実を知っている君だ。／君は僕等の東洋が生んだ草花の匂いのする電機関車だ。(下線部筆者)

‘草花の匂いがする電機関車’ということばの新鮮な結びつきは、三十年まえに読んだ、この詩を、筆者の心のカメラに鮮烈に焼きつけた。

この芥川龍之介の「レーニン第三」の最後の連でも分かるように、ある語(句)は、意味がいわゆる‘通っている’文から、完全に遊離してしまっていて、いわば、‘テキストにぶら下っている’—dangling in the text—ようにみえる。

この、‘テキストにぶらさがっている語(句)は、次の Hilaire Belloc の詩の最後の連にみられる。

#### Ballad of Hell and Mrs Roebeck

1. And so through each declining phase
2. of emptied effort, jaded wit,
3. And day by day of London days,
4. Obscurely, more obscurely lit,
5. Until the uncertain shadow flit,
6. Announcing to the shuddering air
7. A Darkening, and the end of it——
8. And Mrs, Roebeck will be there.

(だから、虚しいあがき、傷ついた神経／そして、ぼんやりと、うすぼんやりと照らされた



／ロンドンの日の毎日まいにちの／だんだんに衰えてゆく一つひとつの場面を通り抜けて／  
やがて定かならぬ影がすいと過ぎて。／震える大気に宣言する／暗くなりゆき、やがて、そ  
の終りを／そして、レーベック夫人は、そこにいる)

この詩に看取されるように、いわゆる、超字句の意味、superliteral な超線形意味は、この詩の 'text' の表面—surface—にはない。

語(句)や、語句の結合の字句の意味を越える deeper syntax の可能性は、西欧の文学・文体研究でも、これまで長い間無視されてきたが、最近になって、Roman Jakobson, Archibald Hill, Eric Enkvist, B. Щербя, Seymour Chatman, Samuel Levin, B. Виноградов, Leo Spitzer, Karl Vossler, Thomas Sebeok, William Empson, Donald Davie によって、とりあげられてきた。これらの研究者の研究は、広い意味では、ガルペリン教授を頂点とする、ソ連の言語文体論でいう、superlinear analysis を指向するものである。

次に、ソ連言語文体論の超線形分析の具体例を求め、ガルペリン教授の分析例についてみよう。

#### Mother and Son

To say that John Forsyte accompanied his mother to Spain unwillingly would scarcely have been adequate. He went as a well-natured dog goes for a walk with its mistress, leaving a choice mutton-bone on the lawn. He went looking back at it. Forsytes deprived of their mutton-bones are wont to sulk. But John had little sulkiness in his composition. He adored his mother, and it was his first travel. Spain had become Italy by his simply saying: "I'd like it new to both of us."

The fellow was subtle besides being naive. He never forgot that he was going to shorten the proposed two months into weeks, and must therefore show no sign of wishing to do so. For one with so enticing a mutton-bone and so fixed an idea, he made a good enough traveling companion, indifferent to where or when he arrived, superior to food, and thoroughly appreciative of a country strange to the most travelled Englishman. Fleur's wisdom in refusing to write to him was profound, for he reached each new place entirely without hope or fever, and could concentrate immediate attention on the donkeys and tumbling bells, the priests, patios, beggars, children, crowing cocks, sombreros, cactus-edges, old high white villages, goats, olive-trees, greening plain, singing birds in tiny cages, watersellers, sunsets, melons, mules, great churches, pictures, and swimming grey-brown mountains of a fascinating land.

It was already hot, and they enjoyed an absence of their compatriots. John, who, so far as he knew, had no blood in him which was not English, was innately unhappy in the presence of his own countrymen. He felt they had no nonsense about them, and took a more practical view of things than himself. He confided to his mother that he must be an unsociable beast—it was jolly to be away from everybody who could talk about the things people did talk about. To which Irene had replied simply:



“Yes, John, I know”

### 母と息子

(ジョン・フォーサイトが、いやいや母親についてスペインに行ったということは、ほとんどあたっていないかった。彼は、温順な犬が、とびきり上等の羊の骨を芝生において、女主人と散歩に出かけるように出かけて行った。彼はその骨を振返って見ながら行った。羊の肉のないフォーサイトは、むっつりとして歩いて行くのだった。しかし、ジョンの性格には、ほとんどひねくれたところがなかった。彼は母親を愛していた。そして、それは彼の最初の旅だった。‘ママ、ぼくはスペインに行きたいな。ママはイタリアになん回も行ったでしょう。ぼくたち二人が知らないところがいいな’と、ジョンが言っただけで、スペインはイタリアになってしまった。

ジョンは、素直だけでなく抜け目ないところもあった。ジョンは、予定された二ヶ月を六週間に縮めようと考えていることを、決して忘れてはいなかったが、そう考えていることは、これっぽっちも見せてはならない。とても魅力的な羊の骨と、これほどはっきりした考えをもっている人間にしては、彼は自分がいつどこに着こうが、気にかけない、申し分のない旅仲間だった。食べものには目が利き、イギリス人の多くは知らない土地をよく知っていた。彼に手紙を書くのを、フルーが拒否したのは大変かしこいことだった。彼は、新しいどの土地についても、期待や熱っぽさを持ち合わせなかった。そして、ろばや、回転ベルや、牧師や、中庭や、乞食や子供たちや、ときをつくるおん鶏や、ソンプレロや、サボテンの生垣、高台にある白い壁の古い村、野羊、オリーブの木、緑が萌え立つ野原、かわいらしい籠で鳴いている鳥、水売人、日没、メロン、らば、大伽藍、絵画、心を魅する国の、めくるめく灰褐色の山なみなどに、すぐに没頭することができた。

もう暑くなっていた。彼らは、仲間がいけないことを楽しんだ。ジョンは、彼の知るかぎり、イギリス人の血しか引いていなかったが、彼自身の故郷の人たちがいると、どうしようもなく、たのしくなかった。ジョンは、彼らは謹厳であり、物事を彼自身よりも、もっと現実的に見ていると思った。自分はずきあいの悪いやつなのかもしれない。人がしゃべるようなことについてしゃべれるような誰からも離れていることはじっさい、楽しい、と、彼は母親に打ち明けた。このことばに、イリーネは、ぽつんと答えたのだった。

「ええ、分かっているわ、ジョン」

ここで作者は、読者に何を言おうとしているのか？ 彼の言わんとしていることは何なのか？ 彼は、読者に、母親と息子がスペインに行くことを決めた。息子がスペインを選んだのは、母親がイタリアには、すでに行ったことがあるので、息子のジョンは、この旅行が二人にとって始めてのものでありたいと思っている、ということだけを言っているのか？ ゼったいにそうではない。そんなことは、この一節の字句によって表面に表われていることで、とり立てていうには及ばない。この表層の意味は、作者がほんとうに言いたいことの背景になっているのだ。ここで作者がやっていること、言っていることは、ジョンの性格の描写、彼の心の中の想い、彼の趣味、彼は生まれがフォーサイトでないこと、などである。

登場人物の性格描写は、いっぺんに、あるパラグラフ全部をこれにあてるやり方と、断片的、挿入的にやってゆく方法とがある。ちょうど一般的な叙述のカンバスに、ひと刷け、ふた刷けとおいてゆくように。上に引用した「母と息子」の一節では、ゴールジワージーは、後者の方法によっている。たとえば、But John had little sulkiness in his composition. He adored his mother. (ジョンの性格には、ほとんどひねくれたところがなかった。彼は母親を愛していた)、the fellow was subtle besides being naive…… (ジンは、素直なだけでなく、抜け目ないところもあった……)、……he was innately unhappy in the presence of his own countrymen (……彼自身の故郷の人たちがいると、どうしょうもなく、たのしくなかった。)

さきに、超線形分析のパラメーター、アメリカの記述言語学でいう marker は、語(句)の意味と語句の結合の意味の複合体であることを述べたが、いま挙げた、ジョンの性格描写の文が、「母と息子」の中で、どう分布しているかをみよう。

ジョンの性格描写を始める二つの文、/John had little sulkiness in his composition と He adored his mother は、第一パラグラフの文の真ん中にある。この二文の前後の文は、いわば、背景となる、場面の文脈コンテクストをつくり、読者を、このジョンの性格描写に準備すると同時に、この性格描写をきわ立たせる。この場面のコンテクストは重要である。このコンテクストは、ジョンの生き方や、その環境について述べ、また、フォーサイト家が、英国の典型的な中産階級の家であることについても述べているからである。

ジョンの性格について述べる第3の文は、第2パラグラフの始めにおかれ、第4の性格描写の文からは、長いパラグラフ全体によって切り離されている。この長いパラグラフの終りの部分で、作者は、自らのスペインへの愛を披瀝している。そして、この部分も、場面のコンテクストとして働いている。

The fellow was subtle besides being naive の文と、John…… was innately unhappy in the presence of his own countrymen の残り二つの性格描写の文も、最初の二文と同様に、背景となるパラグラフのなかに埋めこまれている。この背景となる文がつくるコンテクストは、ジョンの目からみた因襲的、实际的なイギリス人を、我々読者に瞥見させてくれる。

次に、ゴールジワージーの筆使いの特性について考察しよう。He adored his mother and it was his first travel (彼は母を愛していた。これは彼のはじめての旅だった) It was already hot, and they enjoyed the absence of theis compatriots. (もう熱かった。彼らは仲間がいないことを楽しんだ) ガルペリン教授は、このような文を、missing link compound sentence と呼んでいる。この手法の本質は、教授によれば、意図的に、つなぎの文を省略して、読者にそれを補わせることにある。Plimpton が Hemingway との interview の中で、‘知っていることを省略すると、省略した部分は、作品を下から支えるが、知らない部分を省略すると作品に穴ができる’。と言っている。(‘Anything you know you can eliminate and it only strengthens your iceberg. It is the part that doesn’t show. If a writer omits something because he doesn’t know it then there is a hole in the story.’ *Hemingway and His Critics: An International Anthology*, 1961, p. 34.) これは、有名なヘミングウェイの表現論の氷山説であるが、このことばは、作者の省略というものが、ガルペリン教授のいう missing link をも含めて、意図的なものであることを証して余りある。

一般的な形で論じた、詩に対する超線形分析の具体例の考察は、紙幅が大幅に超過することをおそれ、別の機会に譲る。

—finis— Nov. 30, '76

## 注

1. 'Moby Dick is an easy book, as long as we read as a yarn or an account of whaling interspersed snatches of poetry. But as soon as we catch the *song* in it, it grows difficult and immensely important.' (E. M. Forster, *Aspects of the Novel*, Pelican Books, 1962, p. 141.)
2. 'At present I am trying to view some of the stylistic maxims from a standpoint which seems to me very suggestive, I mean from the standpoint of the theory of information' (1963年11月27日付)
3. a. *An Essay in Stylistics*, Moscow: Higher Publishing House, 1968. 63 pp.  
b. 'Стилистика: является ли стилистика уровни языка?' 贈られた offprint では bibliographical data は不詳  
c. 'Some principal issues of style and stylistics as viewed by Russian linguists', *Style* vol. 5 (1971) 1: 1-20 pp.  
d. 'An Experiment in superlinear analysis', *Language and Style* vol. 4 (1971) 1: 57-72 pp.
4. Ю. С. Сорокин, 'К вопросу об основных понятиях стилистики' (ユー, エス, ソローキン, 「文体論の基本概念の問題」)
5. Л. В. Щерба, 'Современный русский литературный язык', <Русский Язык в Школе> vol. 4 (1939) стр. 19-26.  
В. В. Виноградов, <Задачах истории русского литературного языка преимущественно XVII—XIV века>  
6. <Вопросы языкознания>, vol. 3 (1954) с. 68. fn.
7. Galperin, 'Some principal issues of style and stylistics as viewed by Russian linguists', *op. cit.*, p. 2.)
8. А. И. Смирницкий, <Древнеанглийский Язык>, 1955, p. 7.
9. *Proverbs Explained*, 1969 (Pan Books) p. 145.

## Résumé

The writer attempts at assimilating and assessing stylistic analysis of a literary piece of work, informed by Soviet studies in linguistic stylistics, especially by the technique of 'superlinear analysis'.

The antecedents of Soviet stylistic studies of linguistic persuasion stem from the works of Scherba ('Present-day Russian literary language' 1934.) and Vinogradov (The task of history of literary Russian in XVII-XIV century') and other specialists in Russian and its related languages at around 1920 and 1930.

The search for the identity of linguistic stylistics in its modern version, that is, in the vein of scientifically oriented linguistics in and around 1954 and 1955 was inaugurated by the appearance of Solokin's 'On the fundamentals of Stylistics' in *Problems of Linguistics* (1954), and by the appeal for the discussion on stylistics by the editorial board of this bimonthly periodical.

Piotorski in his 'Some stylistic categories' (*Problems of Linguistics* (1954)) levelled criticism against Solokin, and maintained that Solokin mistakenly denied the existence of stylistics in his endeavour to boil down stylistic function to contextual one.

The interested scholars answered the call of the editorial board and went out of their way to participate in the stylistic discussion, which had already been under way between Solokin and Piotorski.

The resultant studies, some of which took issue with Solokin's point, appears mostly in *Problems of Linguistics*. The bare mention of the authors and their papers that follow will amply illustrate the scope and extent of stylistic discussion in the Soviet Union around the mid-50's.

1. R. A. Budagov, 'On the Problem of linguistic stylistics', *Problems of Linguistics*, vol. 3 (1954) : 54-67.
2. I. R. Galperin 'Style of speech and stylistic means of language', *Ibid.*, vol. 4 (1954) : 76-86.
3. G. V. Stepanov, 'On artistic and scientific style of speech', *Ibid.*, vol. 4 (1954) : 87-92.
4. U. G. Admoni & T. I. Sul'man, 'Selection of linguistic means and problems of style' *Ibid.*, vol. 4 (1954) : 87-92.
5. A. V. Fedorov, 'In defense of some conceptions of stylistics', *Ibid.*, vol. 5 (1954) : 65-83.
6. Editorial Board, 'Discussion of stylistic problems : Excerpt of the papers received', *Ibid.*, vol. 6 (1954) : 80-87.
7. V. V. Binogradov, 'Summing up : Discussion of stylistics', *Ibid.*, vol. 1 (1955) : 60-81.

Standing on the shoulders of the giants who have preceded and paved the way

to Soviet studies in stylistics, Professor Galperin, who holds the Chair of Stylistics and Lexicology at Moscow State Institute of Foreign Languages, puts forth what he calls 'superlinear analysis' of literary works. He seeks his theoretical foundation in information theory, and makes an inspiring analysis of Galsworthy's 'Mother and Son' in *Forsyte Saga* in terms of this procedural analytic technique of his own making and naming.

He maintains that superlinear analysis is not, and should not be 'a mere flight of fancy'. This procedural technique, he adds, must strictly confine itself to 'the limit of potentialities embodied in the form'.

The forms that the words and phrases take in sentences and/or in connected speech, along with the combination of these forms, function as parameters i. e. as markers which unequivocally signal the deeper meaning of a particular sentence and/or connected speech. In terms of superlinear analysis, Professor Galperin asserts, meanings of the forms of words and the ways these words are combined work as forms which are to elicit deeper, that is, superlinear meanings of the given portion of passages and utterances.

Superlinear analysis sometimes goes beyond the limits of sentences and segments of the work under scrutiny, and strives to probe deep into the purport of the author until it penetrates into the innermost core of the art of literary creation.